# 今村 健二

㈱オーレックホールディングス社長

いまむら・たけじ／久留米市出身。1952年7月5日生まれの73歳。明治大学工学部卒。父が創業した大橋農機㈱（現オーレック）に76年入社。営業部に配属され関東から東北エリアを開拓。現場の声を反映した製品が大ヒット商品に。88年社長就任と同時に現社名に変更した。海外への販路開拓も手掛け世界30カ国以上で販売を実現。23年1月ホールディングス化に伴いグループ代表に就任。趣味は自然散策、座右の銘は「百見は一感に如かず」

## 地域から世界の農業を変える
# 国際的な事業家表彰プログラムで部門大賞

斜面の草を安全に刈れるスパイダーモアー　乗用タイプで労力を軽減できるラビットモアー

## 地域創生リーダーに

農機製造大手㈱オーレックホールディングス（八女郡広川町）の今村健二社長は、国際的な事業家表彰プログラム「EYアントレプレナー・オブ・ザ・イヤー2025ジャパン（以下EOY主催：EY Japan）」において「リージョナル・バイタライゼーション・リーダー（地方創生リーダー）部門」大賞を受賞した。

EOYは世界約80カ国145都市で展開される国際的な表彰プログラムで、選考基準には「革新性」や「社会への影響力」、そして「長期的価値の創出」といった、より良い社会の構築を目指すリーダーとしての資質が厳格に求められる。世界では過去にアマゾンの創業者ジェフ・ベゾス氏やグーグルの創業者ラリー・ペイジ氏とサルゲイ・ブリン氏も名を連ねてきた歴史があり、日本での開催は25年目を迎えた。

今村社長は同団体の推薦を受けて2025年秋に九州代表に選出され、その後12月に東京で行われた全国大会で、面談形式のプレゼンテーション審査を経て、日本や世界に影響を与える事業家として確かな評価を受けた。

「世の中にインパクトをもたらしたという視点は新鮮な感覚で、目の前の課題に真摯に向き合ってきたことが、新しい価値創出になり、それが社会的インパクトをもたらすことにも気づかされた」と今村社長。九州代表選出直後は「2代目である自分が相応しいのか」という気持ちもあったが、選考過程で自らの経営改革を客観的に捉えなおす好機になったという。

## 現場課題への対応が「持続可能な農業」を拓く

経営において追求してきたのは「農業現場の安全・安心」。1988年に36歳で父から経営を継いで以来、国内の農業市場が縮小傾向の逆風の中で既存の枠組みにとらわれない新たな市場を切り拓いてきた。その象徴ともいえるのが、重労働で危険を伴うことが多かった草刈り作業の機械化である。

特に、高齢化が深刻化する中山間地域において、農業を継続するための基盤づくりを急務とし、現場の声を拾い上げ、そのフィードバックを製品開発へと反映させていった。その結果、畦草に対応した斜面草刈機「スパイダーモアー」や乗用草刈機「ラビットモアー」など業界初の革新的製品を次々に世に送り出し、農業現場の課題解決に大きく貢献。この現場第一主義の姿勢こそが、年商200億強の国内トップシェアを誇る同社の成長の原動力になっている。

さらに、早くから世界を見据え、販路を九州から全国、そして海外へと積極的に拡大。約30年前からフランスのシャンパーニュやボルドー、ブルゴーニュといった世界の名だたる高級ワインの産地に同社製品が導入され、その技術力は世界標準で認められている。

今村社長が次に見据えるのは「持続可能な農業の深化」。農・環境・食・ITを軸に現場発想のものづくりを通じて社会課題の解決に一層力を注ぐ。現在、同社は農林水産省の「みどりの食料システム戦略」に呼応し、2030年を見据えた中期計画「グリーン・イノベーション・カンパニー」を掲げている。化学農薬に頼らない除草技術や有機農業向けの専用機械の開発を進め、「誰でも有機農業を始められるという仕組みをつくること自体が一つのインパクトになるのではないか」と今村社長。国主導のトップダウンではなく、現場で長年培った技術力と地域との密接な連携によって、解決が困難とされてきた課題をこれからも突破していく強い姿勢を示す。

今年5月にモナコで開催される世界大会「EYワールド・アントレプレナー・オブ・ザ・イヤー2026」に招待されている。「地域から生まれた技術を全国、そして世界へ発信することで日本の農業技術の優位性を示し、農業に携わる皆さまに喜んでもらえる仕事を続けていく」と地方創生のトップランナーとしての歩みは、農業の未来を明るく照らしている。